
箱をあけよう

ひろりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱をあけよう

【Nコード】

N3878BA

【作者名】

ひろりん

【あらすじ】

大学をでたものの、職につけず、あせっていた芽衣子が、やっと手に入れた就職先で、あやしき満点の＜幸せの赤い箱＞を、ちよっとかつこいい、でもへんな人候補な近所のお兄さんから、もらってしまいました。

その上、その箱、幸せになるために、開けてしまいました。

それが、異世界へと芽衣子を飛ばしてしまいます。

芽衣子は幸せを手に入れることができるでしょうか？

人の話はよく聞きましょう（前書き）

この小説の主人公は特別な能力はありません。

基本、週末更新です。

人の話はよく聞きましょう

ガランガラン。

大きな鈴の音を響かせながら神社の境内で芽衣子は熱心に祈った。

「今年こそ大吉とまでは言わないものの、せめて中吉くらいの幸せがきますように。」

その後、お財布から百円玉を1枚取り出し、賽銭箱にいれた。そうして、もう一度、手を合わせて再度祈る。

冷たい風が、後ろから吹き付ける。

正月もすでに10日過ぎて、境内には数えるほどしか人はいない。

本当は、年始のお参りは三が日の内というものだが、

この不況時に、やっと手に入れた職業が、それを許さなかったのだ。

大学を卒業して、就職できず、フリーターと呼ばれる人種に分類されてから

半年あまり。

何度も面接を受けに行ったが、これといって美人でもなく

コネもなく、資格もない芽衣子を受け入れてくれる会社があるわけがない。

アルバイトでなんとか食べてはいけるものの、希望どりの職にっくなんて、

夢もいいところだ。

一応国立大出だし、いろいろ希望を持っていたのだが。

なんとかならないものだね。人生は。

誰が言ったかわからない言葉が頭によぎって、
大きなため息をつく。

そうして、手にもった竹箒を、左右に動かして境内の掃除を
はじめた。北風が、またふきこんで、箒の先にあつめた落ち葉を散
らしていく。

ふいに、芽衣子の後ろから男性の声がした。

「すみません。おまもり1つください。」

芽衣子は竹箒を右脇に抱え、急いで社務所に入っていった。

「はい。交通安全のお守りですね。5百円になります。」

この年末年始の怒涛の受付で、
顔にはりついたサービス0円の笑顔を振りまきながら、
男性に手を差し出した。

男性は年は30前後だろうか、
背は芽衣子より10cm以上高く、肩が割合しっかりとしていて、

顔つきは丹精というより男らしい顔立ちだった。
着ているものは茶色のセーターやこげ茶のウールコートといった、
高そうな格好。

全体的に上品で柔らかな雰囲気をもっている。

男性は、芽衣子の顔を見ながら、手の上にお金を置いてくれた。

「毎年、この神社におまいりにくるけど、君は初めてだね。

アルバイトは三が日だけだし、ここの巫女さんでいいのかな？」

「はい。昨年度末よりこちらで働き始めました。

ご近所さんですか？」

これからよろしくお願いいたします。」

本当は、こちらの社務所でやとわれた事務員、なのけども
巫女服を着ている今は、巫女さんでいいのではないかしら。
そんな風におもって、あえて否定しなかった。

ちょっと説明するのメンドクサイと思ったのもある。

「まあ、近所といえば近所だけだね。

あそこの本屋が入ってるビルわかる？」

あそこが僕の仕事場です。」

男性の指差した先、境内からまっすぐに降りた
突き当たりに聳え立つビル郡の中に、
クリーム色の「龍宮堂古書店」の看板がみえた。

あれ、あんなめだつところに本屋って？ あったっけ？

首をかしげてみて、気がついた。

この辺はまだそんなになじみがないのに
覚えがないなんて、当たり前だよ。
うっかりさんは私だよ。

「綺麗な看板ですね。私は入ったことがないのですが、
誰が入ってもいいのですか？」

あせって答えて、なんだか変な回答をしてしまったようだ。
男性は一瞬驚いた顔をして、そのあと笑い出した。

どうやら笑い上戸のようだ。
なんとなく面白くない。

そこまで笑われるようなこといったらどうか？

私は、むっとした顔をしていたけど、
彼は、なみだ目になりながら、まだ笑っている。

「君、見えるんだね。
でも、本屋に、はいってはいけない人は、

なかなかいないと思うよ。

あと一番に、看板ほめるってどうなの？君、変わってるね。」

目は両方とも裸眼で1.5はあるし。

見えるに決まってる。ばっちり看板の字も見えりとも。

それに、今、本屋があるの気づいたばかりだし。

本屋に、昔からなじみがない私にとって、本屋を題材に話なんて、本屋上級者でない私には、むりな話だよ。

でも、いきなり笑われたことで、

芽衣子の彼に対する評価は、見事に、急降下している。

ちょっと、かつこいいと思ったのに、がっかりだ。

そんな芽衣子に、笑いを収めた彼が、右手のこぶしを差し出した。

「なんですか？」

「いいから手をだして。はい。」

芽衣子の手の上には、小さな10cm角くらいの長方形の朱色の箱があった。

「それは玉手箱かな。

まあ、幸せがつまっているって、いわれているけどね。」

玉手箱？

開けると、煙が出てきて、おじいさんになっちゃうあれでは？

「開けると帰ってこれないけど、持っているのと、幸せになること請け合いだよ。」

分けてわかんない。

この怪しい箱は、呪いの箱の間違いではないだろうか？

「君、気にいったから、これあげるよ。」

いまの会話のどこに、気に入る要素があるというのだろう。

風が大きく凧いだ。

ブルっと、体を震わせていたら、社務所のおくから声が出た。

「芽衣子さん。そろそろお昼にしたら？」
神主さんの奥さんだ。

箱を返して、お別れしようと振り返ると
彼はもういなかった。

なんてすばやい。

呪いの箱もって帰れてんだ。

小さなため息をつき、社務所の窓口をしめる。

今日の、仕事帰りでも、あの本屋によって、箱を返してこよう。
呪いの箱だろうと、一応しあわせの箱って言ってたから、
捨てるのはしのびない。

社務所の奥から呼ぶ声がして、足をむけた。

お昼ごはんのお弁当を食べていると、
外から、阪神巨人のお笑いコンビのように、
大小って体格の2人のおじさんが入ってきた。

「芽衣子さん。お疲れ様。外は寒かったね。

裏庭はあらかた終わったから、

明日からは本殿前を、掃除するよ。」

寒かったのだろう。

背の低い小太りおじさんが、
鼻の頭を真っ赤にして、休憩室の中央に位置している
だるまストーブの前まで、まっすぐやってきた。

「お疲れ様でした。お先にお昼いただいています。
私は鳥居前とお賽銭箱まえの石畳の掃除終わりましたよ。」

お弁当を食べる手をとめてこちらも
報告する。

「今年も大変だったね。でも芽衣子さんがいてくれて
助かったよ。」

背の高い、ちょっと頭頂部が薄いおじさんが、
芽衣子のそばの長机に、湯のみを二つ置いた。

そのまま、だるまストーブにかけてあるやかんから、
お湯を置いてあった急須に注ぐ。

二人のおじさんは、おんなじ社務所の職員だ。

芽衣子は、去年の12月に入って、急遽空きがでた
求人で雇われたため、あまり親しいわけではない
が、この年末年始の、怒涛の忙しさを、分かち合ったのだ。
それで、まあ、お互い親近感みたいなもの
を持っている。

いい人たちのよね。

この職場に人たちって。

雑務が多いし、残業代もつかないし、

給料は今迄で見た中では、安いほうだ。

でも、やっとなつかんだこの職場。

芽衣子は小さな大吉だと思っていた。

さつきから、みんなでストーブのまわりでお弁当を
食べながら、何を報告していたかというところ、
掃除報告である。

普通の大掃除は年末にするのだが、神社は
正月後が大変なのだ。

正月は、とにかく人が多くて、掃除にまで
手が回らないのだが、いざ、正月が過ぎてみると、
ここまでかといったほどの悲惨さなのだ。

夢の島かと思うほど、ごみが落ちてる。
その上、あちこちに落書きやたばこの吸殻、
空き缶など散乱しているのだ。

芽衣子や社務所のほかの職員、
まあ人数は神主さまと奥さんあわせても
6人ほどしかないのだが、
総出で毎日掃除して回っているのだ。

なので、本来社務所の事務員として雇われた芽衣子も
ここ数日は、掃除しか仕事してない。

でも、やっと終わりが見えてきたらしい。
この巫女衣装とも、もうじきお別れできる。

ここの神社では、旧正月付近までは参拝客が多いため、職員はみんな制服（男性は直垂、女性は巫女服着用）で仕事することになっている。

ちなみに、オジサンたちは色違いの直垂をきている。

コスプレかと思ったけど、

職員と、そうでない人の違いがわかって、いいみたい。それに、この服以外にあったかいのよね。

「そういえば、さっき近所の方が、参拝に見えられてましたよ。」

思い出して、話のねたにする。

「へえ。近所はほとんど三が日にくるんだけどね。どこの人だろ。」

「坂の下の本屋さんで、働いている人だそうです。」

おじさん達はお互い目をあわせて、

「「本屋？」」

「はい、クリーム色の大きな看板の龍宮書店だったかな？」

本屋の店員さんで、交通安全のお守り、買っていかれましたよ。」

「本屋なんて、あったかな？
駅前ならあったけど。」

おじさん達は首をかしげてる。

変なの。

あんなに、目立つ看板なのに。

まあ、興味がないと目に入らないって言うものね。

「そういえば、芽衣子さんの前に働いていた彼女も
本屋がどうかいってなかったか？」

小太りオジサンが、なにか記憶にひっかかったようで、
眉間にしわをよせて言った。

前任者の彼女？

って結婚して、やめたんじゃないかったけ？

面接のときに、神主さんがぼろって言ってた気がするんだけど。

「そういえば、彼女は突然宝くじは当たるは、

彼氏に新しい職が決まるはと

いろいろよいことづくめで、

やめていったときは幸せ満開だったね。」

う、うらやましい。

「幸せの箱って、なんか小さい箱を大切にしてたね。
あれ、中身なんだったんだろうね。」

は？

「ああ、赤い箱ね。持ってたね。
中身はなんだって聞いたら、
秘密だって嬉しそうにいつてたよ。」

なんですと？

「神主さんの奥さんと仲良くしてたから、
奥さんなら、もっと、いろいろ知っているだろうけど。
幸せは、人それぞれだからね。
それに、お金があたると、悪いこともいろいろあるし、
それから、思い込みっていうのも、あるからね。」

おじさん達の言葉は、頭の中を上滑りしていくようで、
聞こえていても、なんとなく頭の中に入ってこない。

なんと。

呪いの箱ではなかったのか。

玉手箱、なんて名前つけるなよ。

あれは、たしか幸せになれるって、いつてたよね。

その前、不吉なことを言っていたような気がするが、
おじさん達が言っていた、振って沸いたような幸運。
想像したら、目がくらみそうですね。

早速今日、アパートにかえったら、開けてみなくては。

本屋に返すのは、開けて
幸運がこなかったときに、
知らん振りして返しにいこう。

うん。

本屋の彼が、言っていたことをちゃんと
聞いていれば、もっと、
慎重になれたのかもしれないが、
そのときは、頭の中から、綺麗さっぱり、
彼の言葉は消えていたらしい。

だって、今、大変混乱しているから。

「いこどこーーー。」

芽衣子は、アパートから帰るなり
赤い箱を開けたのだ。

もちろん、それなりの幸せを期待して。

芽衣子は、目をぎゅっと閉じて
「これは、夢。」

一生懸命、念ずる。

そうっと目をあける。

しかし、そこは一面の海原。

芽衣子は、海の上にただよっている船の上いた。
船といえるのかな？

2畳ぐらいの、いかだ状態の木切れだ。
それにのってちゃぷちゃぷ浮いているのだ。

と、いうより漂流している。

何故、こうなった。

混乱している頭を抱えて、記憶を呼び戻す。

アパートで、玉手箱を空けたら、
煙がでて、むせていたら、気を失ったのだ。

そうして、気がついたら、ここに漂流してた。

あの、玉手箱のせいに違いはない。

「なにが、幸せになる赤い箱よ。

死ぬ一歩手前ではないの。

あの、うそつき。詐欺師。笑い狸男。」

ぶつぶつと文句言っていたら、疲れてきた。

なにしろ、熱いのだ。

太陽が、さんさんと照りつけている。

さえぎるものが何もない。

オーブンの中の秋刀魚状態だ。

じりじりと焼けている。

真冬の日本にいた為、芽衣子が着ている服は、

セーターにパーカージャケット、デニムのジーンズである。

持ち物は、かろうじて腕にかけたままだった、

トートバックひとつだけ。

とりあえず、ジャケットをぬいで、頭の上のかぶせて

影をつくる。

ゆっくりと、周りの海を見渡した。

島影ひとつ、船ひとつ、見えない。

視力1.5も役に立たない。

「視力3・0くらいあったら、もっと見えたのかな？」

とんちんかんなことを言っているのはわかっているが、今のこの状態が受け入れられない。

そうしていると、のどが渴いて、お腹がすいてきた。

自分を一緒にきていた、愛用の母の手作り布バックを手繰りよせる。

中には、いつも携帯しているガムと、のど飴、明日の朝用を買ってきていた、固形の栄養補助食品^{ソイバー}2本、あと、昼に飲んでいた緑茶のペットボトルが半分。

それに、なぜか、コンビニでかってきていたサララップとお湯を注ぐだけのカフェラテのスティック。あとは、いつも使っている簡易救急セットとお裁縫セット、手帳にボールペン。携帯電話。

もちろん、携帯は県外だ。

アンテナなんて立たない。

こんなことになるのなら、サバイバルキットとかお腹にたまるパンとか、携帯用食料買っておけばよかった。

とりあえず、ソイバーを半分食べて、お茶を一口飲む。

もっと食べたいけど、いつ船がとおりかかるかもわからないので我慢することにした。

生きていけるように、最大限の努力をしなくては。

芽衣子が考えていたのは、それだけだった。

そうして、波の色も音もまったく変わらない風景にどのくらいしていただろうか。
次第に、太陽の位置が傾きはじめた。

夕日が斜めに差し込んで、まぶしい。

あちらが西になるんだ。

夕日を見ながら、そう思った。

そして、夜がくるんだと。

この暑さが去ったのだ。

だけど、日が沈むと回り一面、真っ黒なのだ。
自分の手足さえも目で確認することができない。

その上、寒い。

夜を渡る風は、芽衣子が、昼の間に
ためていた暖かな空気を根こそぎ奪っていく。
汗でぬれていた服は乾いているが、風で
しけっていくようだった。

頭にかけていたジャケットをはおり直して、
風にあたる面積をすこしでも減らすために

座っていた木切れの上に横たわる。

チャプチャプを海の音が耳にちかくなって
恐怖が忍び寄る。

怖い。

真っ暗がこんなにも怖いと思わなかった。

昔、明かりがなければ星がよくみえて

いいよねっていつてたけど、

こんな、海の上では、星の光なんて届かない。

月も出ていない、今夜のような日は

ただ、暗闇のみがある。

恐怖がすぎると涙も出てこないって
本当だったんだ。

その時、木の板越しに何か

海が揺れていることに気がついた。

さっきまでの凪いだ波ではなく、

うねり始めている。

どうしよう。

思ったけど、こんなところでは
どうにもならない。

そのまま木の板に体を押し当てようにして、
波のうねりにたえる。

ざぶぶ。

どこかで音がした。

どンドン音が大きくなっていく。

そして、ドン。

大きな音がして、芽衣子は乗っていた板切れごと
跳ね飛ばされた。

それは、交通事故にあった衝撃といった感じ。
ふわって浮いたかと思うと、次に引っ張られ
床にたたきつけられているような。

芽衣子は何がなんだかわからなかった。

「………」

誰かが叫んでいる。

小さな光が揺れていた。

誰？

助けて！

死にたくない！

小さな光の向こうで、誰かの顔を見た感じがしたのだが、
痛みとどんどんひっばられているような意識が
ふっと沈んだ。

そうして、芽衣子は本日2度目の気絶をしていた。

身振り手振りは異世界でも通じました。

つんつとした薬品の匂いがした。

鼻から抜けたとき、冷たいような、痛いような嬉しくない感覚がした。

この感じは、昔、小学校の医務室で、鼻の頭に塗られた消毒薬の匂いに似てる。

そう思ったとき、芽衣子のすぐ近くで男の人の声がした。

おとうさん？それにしては、声が野太いような。

とりあえず、目を開けるべきだろう。ちよっと、薄めに目を開けてみた。

芽衣子のぜんぜん知らない男の人が、芽衣子の顔をじっと見ていた。
それも、至近距離。

はっ？目が青い？

顔よりも目が一番に会うのだろう。

驚くより、納得してしまう。

百聞は、なんとやらではないか。

息をするのより早く、瞬きしてみる。

「##****…..?」

目の前の青目の外人が、芽衣子に何かいったけど、さっぱりわからない。

「****…..?」

また、話しかけてきたけど、わかんない。

一応大学出ているから、英語と、第二外国語でフランス語取ったけど、

言葉のとっかかりというか、まったく違うようだ。

わからないと言うのは、どうやって言えばいいのかな。

思わず、頭の中で、変な外人がカタコトで「ワタシ、ニホンゴワカリマセン」って

両手を肩まであげて、首をふるしぐさが浮かんだ。

いやいや、あれは怪しすぎるだろう。

とりあえずあれはやめよう。

否定は首を振るのいいのかな？

「何を言っているのか、わかりません。」

日本語で堂々と言って、首を振る。

得意というか、話せる言語って日本語だけだし。

同じことを数回していたら、青い目の人が、眉間にしわを寄せて右の眉を大きくあげた。

しばらく、じっと私を見ていたが、そのうち大きなため息をついた。

うーん、私の言ってること通じたのかな？

彼は、2歩ほど離れて壁際の机のそばのいすに座った。

彼の横にもう一人別の男の人がいた。

びっくりした。

いままでそこにいたの？
全然気がつかなかった。

赤褐色の髪に綺麗な緑の目、
逞しい体つきに、長い足、

30才くらいかな。

男らしい眉に、日焼けしている肌。

いままで生きてきて22年、こんな

印象的な雰囲気を持った人はあったことが無かった。

彼は私を見ていた。

私も彼から目を離せなかった。

しばらくすると、彼はなにか青い目に人にとってから
部屋から出て行った。

誰だろう？

帰ってくるかな？

残された青い目の人は、じっと観察するように、芽衣子を見ていた。

あらためてみると、結構ナイスミドルって感じのおじさんだね。

お腹、出てないし。ひげも似合ってるし、足長いし。

外国の人って、顔の彫り深いから、彫刻みたいだし。

白衣似合っている。お医者さんなのかな。

髪は、焦げ茶色にちらほら白いものが混ざってる。

しわは目じりのところにちょっとだけ。

まだ、そんなにお年寄りってわけではないよね。

若白髪ってやつだね。心配性なのかな。

こっちも負けない。
じっくり観察する。

傍目からみたら、にらめっこしているようだ。

しばらくすると、青い目のおじさんが目を逸らした。

観察終了かな。

とりあえず、勝った。

心の中で、むなしい一人勝利をあげて、周りの観察を
遅まきながらすることにした。

私は今、ベットのう上だ。

えーと、さっきまで、どこにいたんだっけ？

頭が混乱して、順序よく考えられない。

ベットの上を見ていた視線が不意に、左右にぶれた。
そうして、上下にも。

そのまま、揺れている感覚が、体に伝わってくる。

フラッシュバックっていうのかな、海の上で遭難していた自分を思い出した。

私、何かにぶつかった？

そうして、海に落ちたんじゃないかったけ？

体をひねって、自分を確認しようをすると、
とたんに、痛みが左肩と左足に響く。

痛みが急激に襲ってきて、小さい悲鳴のような声がでた。
痛みのひどい場所から、伝染するように頭痛とめまいが
おそいはじめた。

体が、後ろ向きにベットに倒れた。
息を短く吐き、体をこわばらせる。
痛みがすこしでも引くように、
じんじん痛む左肩に右手をそつとあてようとして、
その手を止められた。

青い目の彼が再び私の至近距離にいて、私の手を止めたようだ。

そうして、彼は私の左肩に軟膏のようなものを塗りつけた。
私が、動かないうちに、そのままガーゼをはり、くるくるを
脇を肩を覆うように包帯をまいていく。

そして、私の体の左側をずっとさすっていった。
左足首まできて、私の体がこわばったのを確認して、
またさっきの軟膏を塗りつける。

そして、同じようにガーゼを包帯を巻いてくれた。

実に、手際よい。

軟膏を、ぬってもらった箇所がひんやりして、気持ちよい。

長い、息をはく。

ああ、だいぶ楽になった。
お礼を言わないとね。

「ありがとうございます。」

ベットの上の私の様子をじっと見てた彼に、
私は小さく頭を下げる。

そして、ふと気がついた。

私、服、下着しかきてない。
寒いと思った。

ではなくて、ええと、この、中肉中背な、ぷよぷよな体を見られている。

ということだよね。ナイスバティから程遠い
ダイエットしましょう体を。

はつまり、あの緑の目の彼にも見られたってことだね。
わかってたら腹筋部分息をとめて少しでも
細くしたのに。

一応、嫁入り前の娘ですから、
一気に羞恥心というものが
頭をよぎって、顔が赤くなってきた。

でも、今は、目の前にいるのは、お医者さんのみ。
お医者さん相手に照れるのもいまさらだし。
どういったリアクションが正しいのかわからない。

うーん。とりあえず、掛けてくれていたごつい
布を引き寄せて、隠せるところは隠そう。

かろうじて、痛みがなく動かせる右手で、布を引き寄せようとする
と、

お腹の辺りにばさって、ワイシャツのような服が落とされた。

「………***。」

声がした方をみると、それを羽織れって言っているようなしぐさを、彼はしていた。

ゆっくり、痛みが響かないように、
右手を軸にして体を起こし、シャツをはおる。

大きいから、ゆったり着れる。
でも、ボタンがとめられない。

ボタンのところでもたもたしていたら、彼の手がにゅっとのびてきて、
大きな手で、器用にボタンをとめてくれた。

子供の時以来だよ。

服を他人に着せてもらうなんてね。

そうして、シャツを着終わったところで、ノックの音がした。

「……**…*…*…||—^」

別の人の声がして、机の左横の木のドアが開いた。

明るい茶色のくるくる巻き毛にそばかす、大きな茶色の目の男の子が
お医者さんのそばにトレーを持って入ってきた。
そこから、美味しそうな匂いした。

ぐうつ

反射的になった。

うん。正直なお腹だよ。

欲しいって言葉でしゃべるより、明確だもんね。

何か二人でしゃべってたが、少年がにこにこ笑いながら、トレーを持ってきてくれた。

野菜スープとちいさな黒いパン、あと、りんごみたいな果実が一個。

トレーをベットの上に置き、

少年がスプーンを渡してくれた。

そして、これを飲むんだよってなしぐさをしてくれる。

一口、飲んでみたら、美味しい。

二口目をすくおうとすると、右手の上に少年の手が乗せられて、パンを指さされる。

ああ、パン食べるのね。

スプーンを置いて、パンに手を伸ばした。

硬い。乾パンっていうより、石みたい。

片手でちぎれないので、苦勞してたら、少年がパンを私の手から取り上げて、目の前でスープに漬けた。スープに全部浸したあとで、スプーンを再び渡された。

硬いパンはスープがしみこんで、やわらかいスポンジのようになっっていた。

なるほど、こうして食べるのね。パンがしっとりして美味しいよ。

全部食べ終わったところで、少年の手が果実を二つにうまく割った。それを渡されて、食べるんだよってな感じで身振りする。

そのまま、かじった。

甘酸っぱい。梨のような舌触りなのに、マンゴーみたいな濃い味。瑞々しく、美味しかった。

「美味しい！」

びっくりして、果実を見つめていると

「ルーレ」

少年が不意に言った。

少年の方をみると、果実を指さしながら、もう一度言った。

「ルーレ。」

えーと。これは果実の名前なのかな？

果実を私も指さして、復唱してみる。

「ルーレ？」

少年がにこにこしながらうなずいた。

そうか、この美味しい果実はルーレというのか。

ぼんやりとだが、なんとなくはじめての意志疎通ができたような感じがした。

そのままくるくる少年は自分の胸を指差して、

「ルディ」

と言った。

私も反復してみる。

「ルディ？」

少年はルディと言う名前のようにだ。
にっこり笑っている。

次は、私を指差した。

ああ、私の名前ね。

「芽衣子。」

「メーロ？」

うーん。迷路ではないし。

言いにくいのかな。外人さんだし。

「メイ」

省略してみた。

「メイ」

通じたようだ。よかったよかった。

こんな感じで芽衣子の初の異文化交流がはじまった。

勉強は必要ですね。

あれからルディくんは、毎日、芽衣子のいる医務室にきてくれて、身の回りのものやこまごまとしたことを身振り手振りをいれながら、教えてくれた。

あと、青い目の医者らは「セラン」といった。
セランは、私の手当てと簡単な世話を、毎日してくれながら、ルディと一緒に言葉を教えてくれた。

ノートと鉛筆が欲しかった。
でも、無いものはしょうがない。
セランが使っていた羽ペンはいんくにつけるタイプで、万年筆すら使ったことの無い芽衣子にはハードルが高すぎた。
また、貸してくださいってどうやって伝えたらいいのかわからない。

私は、教えてもらった単語と、それを指し示す物を指差し確認しながら、毎日、反復勉強した。
繰り返し繰り返し、それこそ寝ている時間以外を、勉強にあてていた。

セランの手当てが良かったのと、

なるべく動かないように生活していたのが
良かったのだろう。

この船に私が拾われて3週間経ったころには、
左肩の打撲と左足首の捻挫も
だいぶ良くなってきていた。

カタコトだけれども、
彼らの言葉が理解できるように
なった。

セランとルデイの言うことにも
私が反応しているのが
わかるみたいで
日々、語尾が増えていく。

そろそろ、私の気になることを聞いてみてもいいだろうか。

「セラン、私、布、かばん、どこ、知る？」

単語を並べただけだが、通じたようだ。

セランは小さく頷いて、セランの机横のミカン箱サイズの
木箱を渡してくれた。

木箱の中を見ると、
私が着ていた服と持っていた
かばんが一緒に入っていた。

かばんの中から携帯を取り出す。
急いで開けてみると、
電源すら入らない。
海水につかったせいだろうな。

ペットボトルのお茶もそのまま
あったけど、あれから3週間だよ。
なんとなく、にごってる。
くさってるな。
後でトイレに捨ててこよう。

他の荷物は無事みたい。
全部海水につかったせいでよれよれに
なっているけどね。

私がひとつずつ、中のものを出して確認していると、

「なあ、それなんだ？」

セランが聞いてきた。

のど飴のきらきらした袋を指していたので、袋を開けて、ひとつセランに差し出した。

「甘い、食べる、好き、いる？」

セランは困った顔をしていたので
個袋を開けてひとつ食べてみる。

うん。

かりんののど飴。

蜂蜜いりでこれ好きなのよね。

思わず顔がにんまり。

「僕も欲しい。」ルディが言ってきたので、
個袋から開けてルディの手のひらに飴を乗せる。

「甘い。すごい美味しい。」

ルディの目が驚きで見開かれる。

「甘いのが苦手だからなあ。」セランが苦々しく言う。

そうか、ガムなら大丈夫かな。

ガムのビンの蓋を開けて、手のひらに乗せ、セランに差し出す。

「甘くない、辛い、鼻、噛む、目、覚める、冷たい」

うーん。ガムの表現ってば、難しい。

セランが複雑な顔をしていたけど、
私の手からガムをとって、口に入れる。

「噛む、鼻、目、っーん」

とりあえず、注意する。

「おう？ 何だこりゃ。 鼻とのがスースーする。
面白い味だな。」

気に入ったようだ。

しかし、ガムを知らない人がこの世の中にいたとは。
不思議なものだ。

まあ、日本でもガムが入ってきたのは戦後なのだから、
それもありかな。

彼らと飴やガムを食べながら
この三週間を振り返る。

この三週間、この部屋から出るなど
言われていたのと、怪我をしているので、
この部屋から出ていない。
また、訪ねてくるのはルディとこの部屋の
持ち主のセランのみで他の船員などは
一度も見えていなかった。

もちろん、あの時いた、緑の目の彼にも
会えていなかった。

セランとルディの会話から、
この船は結構大きな船で、
沢山の人数が働いているとわかっていた。
だから、そのうち、他の船員とかに会えたら
日本のこととか聞いてみようと思っていたのに、
ぜんぜん、会えない。

この船はどこに向かっているのかと
聞いても、土地になじみかない私では、

さっぱりわからない。

どうしたらいいんだろう。

いまさらだけど、不安を感じ始めた。

それに、こうして助けてもらって世話をしてもらっているのに、私、お返しするもの何も持っていない。

体はだいぶ、動くようになってきたし、何か私にできることないだろうか？

「ケガ、良い、手伝い、何、する、ある？」

つたないカタコトで、二人に伝えてみる。

二人はちょっと驚いた顔をした。

でも、鶴だって恩返しするんだから、人間はもちろんするべきでしょう。

意志を伝えるように、まっすぐに二人を見る。

「じゃあ、船長に聞いてみるよ。ちょっと待ってて。」

そういつて、ルディは部屋を出て行った。

そういえばお世話になっているのに、船長さんに挨拶すらしていない。

いや、したくても出来ない状態だったんだけどね。私って、とつても、ダメダメ人間ではないの。ここはしっかり、お礼をいっておかなくては。

うん。

拳をぐつとにぎって気合をいれながら、深呼吸。

何人かの足音がした。

船長さんをルディが連れてきてくれたみたい。木のドアが大きく開いた。

そこには、あの印象的な緑の目をした彼がいた。

男の子になりました

ルデイが連れてきたのは二人。

一人はあの時医務室にいた緑色の目の彼。

3週間ぶりにあえた彼の姿にどきどきした。

少し長くなっていた赤褐色の前髪から

見える緑の目が、明かりとりの窓から差し込む

光に反射して、まるで猫の目のようにきらきらしていた。

じつと彼を見つめていたら、どこからか

黒髪の男の人が出てきた。

いや、そばにいたのだろう。

私が目に入れなかったただけなんでしょうね。

黒髪の方は水で薄めた感じの水色の目をしていて。

にこりもしないその表情がちょっと冷たそう。

なんとなく、どこかで見たことがある容貌をしていた。

でも、外人に知り合いなんていないし。

芸能人に似た人いたかな。

黒髪が私に話しかけてきた。

「貴方はどこの国の人ですか？ 何故、あんなところで漂流していませんか？」

この船の航路を知っていたのですか？

海賊の一味ですか？」

うーん。わからない単語が沢山でできた。

「航路？ 海賊？ その言葉わからない。」

首をかしげて聞き返すと、ずっと目を細めて、にらんできた。

うう だって、知らないんだもの。

説明プリーズ。

「航路とは、船の進んでいく進路のこと。海賊とは無法者、無頼漢、犯罪者です。」

航路は何とかわかったけど、
その後の言葉はもっと知らない言葉だったよ。
どうしよう。

「カース、まだ難しい言葉は教えてないんだ。もっと子供に話す言葉を選んでやれよ。」

セランありがとう。

「面倒ですね。」 チツ。

舌打ちしたよ。この人。

「メイは海賊ではないよ。だって子供だし、多分 僕と同じ歳くらいだよ。」

それに、メイは驚くほど何にも知らないんだよ。」

「そうだな、スパイとかでもありえないな。色気が無さ過ぎる。」

ルディとセランは私のこと、今、かばってくれたんだよね。でも、なんとなく、頭のはじでちくちくする。

「可笑しな格好した漂流者、それも、この海賊がよく現れる海域で見たことも無い持ち物。毒物を持ち込んでいるかもしれない。言葉の通じない振りをしているのでは？」

カースさん、怖いです。

それに、またわからない言葉でてきた。きつ聞くべき？

「漂流者？ 海域？ 毒物？ セラン、 ルディ何？」

怖かったので、カースさんから目を逸らしちゃった。

「あーっと、後で説明してやるよ。」

カース、この三週間ずっと、見てきたんだ。振りをしていたら俺にだってわかる。

それに、さっき彼女の持ち物、食ったけど
なんともないぞ。毒の持込はないな。」

「食べ物らしきものありましたか？」

「ああ、あのきらきらした袋の中は砂糖菓子みたいだ。
あと、葉ビンみたいな中にはいつていたのは、
ハーブみたいなものだな。」

「そう、すごい甘いんですよ。はじめて食べました。」

「この船唯一の船医がおかしげなものを口にしないでください。」

厳しい口調でたださえも怖いのに、右のこめかみに青筋が浮かんで
ます。

いやあ、カースさんは怖い人です。

「それに、やっとケガが直ってきたので、働きたいって言ってんだ。
普通の感性をもった普通の子だよ。」

言葉はまだカタコトなんだ。このまま、次の港でそのままおろし
たら、

あつと言う間に、だまされて、奴隷いきなのは目に見えているだ
ろ。

この船はつぎの港に着くまで少しでも、世間の常識と働ける仕事
の目星を

つけてやったって罰は当たらないと思うんだがな。」

「貴方は宣教師ですか？ 医者でしょう。施しは誰かに任せとけばい

いのでは？

次の港の教会にでも連れて行けば、面倒見てくれるでしょう。
この船の中で揉め事は困るんですよ。」

「漂流者を引き上げて助けるのは船乗りの義務だろうか。」

「ですが、この船に火種をばら撒く必要がどこにあるんです。
この子は女の子なんですよ。」

「知ってるのは、ここにいる4人だけだ。
黙っていれば、ばれない。」

セランさんとカースが難しい顔でにらみあってる。
私のことで弁護してくれているんだろうな。

カースはとっても意地悪を言っている気がするので、
言い捨てにする。さん なんてつけてやるものか。
カースで十分だ。

でも、ここで見捨てられたら、とっても困る。

「あの、働く、私、駄目、怒る、ごめんなさい。」

頭を思いつきりさげて謝る。

私が、この部屋を出るのは駄目、に理由があるみたいなのは
なんとなくわかった。

じっと黙って聞いていた緑の目の彼がゆらっと私の前に
たった。

「メイ。お前は何が出来る？」

張りのあるテノール。

一言、彼が話すだけで、全てが注目する。

「私、簡単、お掃除、片付け、料理　する。」

彼の目を見ながら、答える。

彼の瞳に私の顔がうつってる。

緑色なのに、不思議。

「ルディ、明日から、朝は甲板磨きに厨房の下働き、

午後は家畜の世話と洗濯、夕方は各所の雑用だ。

一緒に連れて行け。　無駄飯分くらいは働いてもらおう。」

うん？　何言ったの？

わかんないよ。

もっとゆっくりプリーズ。

「おい、ちょっと厳しすぎないか？

病み上がりだぞ。」

「無理しないように、ルディが面倒みればいいだろう。

それなら、見張りも兼ねられるし、ルディの仕事も早く終わるだ
ろう。」

どうやら、話決まったようだ。

カースが苦々しい顔をしてる。

ということは、私、この船で働けるの？

恩返しOK？

ルディが嬉しそうに返事する。

「はい。任せてください。レヴィウス船長。」

レヴィウス船長？

それが、この人の名前？

緑の目の彼を見上げる。

「レヴィ船長？ 貴方の名前？」

うん、違ったかな？

「ああ、そうだ。

メイ、俺が、この船の船長だ。

明日から、お前はこの船で働く。

だが、女ではなく男としてだ。

この船には女はいない。

だから、問題が起こらないように、男になるんだ。

わかったか？」

はい。解りましたよ。

そうゆう風にゆっくりと簡単な言葉で話してくれたら、解ります。

しっかりと頷く。

「はい。男、なる。よろしく、頑張る。ありがとう、レヴィ船長。」

にっこり。感謝笑顔全開です。

かっこいい上に理解ある男性、いいなあ。

レヴィ船長はちょっと目を見開いて、私の顔を

じっと見ていましたが、その後、にやりと

笑って言いました。

「ああ、頑張って働いてもらおうか。」

ちよつと笑顔が黒い氣がするのは

氣のせいでしょうか？

その後、セランさんとレヴィ船長、カースさんは

他の事で用事があるらしくて、そろって医務室を出て行きました。

部屋には、私とルディくん。

「明日朝早いから、今日は早く寝たほうがいいよ。」

そうだ、服を着替えたほうがいいよね。

後で、持ってくるよ。

夜明けに向かえにくるからね。」

朝早いよね。

了解です。

「ありがとう。ルディ。よろしく。」

さあ、明日から働きます。

初心者です。

おはようございます。

ルディが夜明け前に迎えにきました。

仕事初めですから、緊張しているようです。

昨夜、何度も目が覚めました。

おかげで、夜明け前に寝過ごすところでした。

緊張は長くもたないってことですね。

まず、朝一番に

船底の船倉のさらに奥にいくと

家畜部屋がありました。

普通に牛が5頭に豚が5頭、鶏が20羽、馬が二頭 いました。
これから、よろしくお願いいたします。

船に動物、積んでるんですね。

船って何でもありますね。

糞をかたずけて、

彼らの寝床のわらを綺麗にしてあげて、

水をあげて、えさをあげます。

ルディは牛のお乳をしぼっています。

プロですね。

牛乳が次々としぼられています。

私は、鶏の卵をひろいます。

基本、柵の中ですが、鶏は自由気ままのようです。ありとあらゆるところに卵がおいてあります。

今日は15個ありました。

それにしても、卵大きいです。

今までスーパーで売っていた卵が

おもちゃみたいな大きさです。

まさにLLサイズです。

牛乳と卵を持って上の階の厨房にいきます。

厨房にいくと、三人のコックさん？が

もう朝ごはんのしたくをしてました。

彼らのうち一番若そうで下っ端そうな男の人に

卵と牛乳を渡しました。

美味しい料理になってくださいね。

それから、食堂の机を拭いて、トレイを

ひとつつつ拭いていきます。

厨房から、声がかかると、

料理のお皿を厨房窓口そばの棚や台にぎっしりと置いていきます。

朝食のメニューは今日はベーグルサンドですね。

卵やハムやトマトやレタスかな。

美味しそうですね。
楽しみです。

それが終わったところに、
食事の時間になったようで、船員達がどやどやと
入ってきました。

料理の載ったお皿をトレーにのせて、
空いた席でお食事されてます。

食事が終わった人はそのまま席を立ちます。
そうしたら、私とルディは、
すぐに席の上のお皿をかたづけて
いきます。

中ほどにはレヴィ船長やカースも
セランもきて、朝ごはん食べていきました。

大方に人が終わったところ、
私たちもご飯です。

厨房の中から声が掛かります。

「おい、そろそろ、お前達も食べておけよ。」

おお、お腹すいて目が回りそうです。
私たちも、お皿を取って、空いている席でご飯です。

「いただきます。」

手を合わせて、食事に取り掛かります。

以前から、私が食べているところを
じっと見ていたルディは私が食事前
にかならず、手を合わせることを知
ってます。

何だときかれたので、

ご飯、ありがとう　という意味だ
と
言っておいた。

まあ、間違っていないよね。

それにしても、早いですね。

ルディはわたしが半分もすまない
うちに、
もう、終わってます。

「メイ、早く食べ終わらないと、
次の仕事が遅くなっちゃうよ。
」

えっそうなの。

急いで、口に入れるんだけど、
かまないと飲み込めないのよね。
ごつくんまで、やっぱり時間が
掛かる。

「先に、厨房の中で次の仕事して
るから、ご飯終わったら、すぐ来
て。」

うん。ごめんなさい。

明日から、ご飯をつつんでおい
て、後で食べれるように、
ハンカチもどきの布を持ってこ
よう。

水と一緒に流し込みながら、急いで食べる。

お皿を持って、厨房にいくと、ルディはお皿を洗うために、樽の中に海水を入れていた。

大きな亀の子だわしのような束子を渡されて、お皿をたらいに入れる。その上から、海水を杓子でかける。

「お皿の汚れを落としてね。終わったら、こっちに並べてね。」

お皿を立てかけて、水切り。

洗剤は使わないですね。

自然にやさしいです。

立てかけたお皿をルディはつぎつぎと拭いていきます。

急がなければ、追いつかれてしまいます。

一心不乱に束子でお皿をこすります。

やっと、お皿を洗い終わったとき、私の手はおばあさんの手のようにしわしわにふやけていました。

お皿洗って重労働だったんだ。知らなかった。

大家族のお母さんは、ずいぶん大変だったんだね。

お皿を食器棚にいれてしまうと、食堂の床を掃いて、

机の上をふいて、綺麗にします。

「つぎは、こっち持って。」

大きな籠を渡されます。

「これから、部屋回りだよ。洗濯物を回収するんだ。」

まず、船長さんのところにいって洗濯ものをとってきます。

その後、副船長やそのほかの船員の部屋の前にいったら、同じ籠が部屋の外にあった。

ただし、中身が満載でしたけど。

持ってきた籠を部屋の中に入れて、洗濯物満載籠をひきずって小さな部屋に入る。

「先にほつれや破れが無いか、確認するんだ。

無いものはそのまま 洗濯籠に、

あるものはここで、直してから洗濯だよ。」

ほうほう、洗濯後ではないのですね。

こう見えても裁縫は得意ですよ。

お直し服は半分ほどです。

肩のほつれだったり、脇が破れていたり、袖が切れていたり、すそに穴が開いていたりです。

でも、この服の布とってもごついですね。
手が痛くなりそうです。

指貫が欲しいです。

木綿針の太いもので、ぐさぐさとルディは縫っていきます。
やっぱり男の子ですね。

それでは、穴がすぐ開いてしまうでしょう。

遅いなりに丁寧にしていたら、ルディがほとんど
しあげてしまいました。

洗濯籠をもって甲板へいきます。

甲板の端っこで洗濯籠を置いて、
二つの盥に、桶でくみ上げた海水を入れていきます。

えっ服洗うのも海水なの？

「汚れ落とすのは海水で十分だよ。
最後の一回は真水で濯ぐけどね。」

お水は貴重なのです。
そうですね。

「服を海水につけたら、甲板磨きだよ。」

く、体がすでにだるいです。
ルディは平気な顔でデッキブラシを持ってきた。
若いっていいわね。

靴と靴下を脱いで、木箱にいで、ズボンのすそを捲り上げる。

回りをみたら、ルデイのほかにも
7、8人の船員さんが、同じ格好になって、
デッキブラシや、束子、雑巾を持ってる。

その中で一番年配の人が、声を張り上げる。

「はじめるぞー」

甲板の上に海水が撒かれると、皆いっせいに、
掃除をはじめる。

大仏殿の年末大掃除みたいだ。

セラランが医務室から出てきていた。
私のこと心配してくれているのかな。

私もデッキブラシをもって、ルデイのまね。
ごしごしこすりながら、甲板の端から端まで。
これは、甲板の上に出てくる、水垢やコケを落としていくんだっ
て。

きちんと落としてないと、誰かがすべって転んで、ケガをする。
それに、嵐が来たときにすべると、踏ん張りがきかなくて、
船から落ちてしまうことがあるそうです。

滑って、海の中へ落ちちゃうの？

漂流していた記憶が戻ってきて、
背中が寒くなります。

真剣にごしごし。

全部、磨き終わったら、また海水を撒き、デッキブラシで
浮いた汚れを海へ落としていきます。

ルディなんか、慣れたものでスケートしてるみたいに、
すいすい走っていきます。

気持ちよさそうです。

いつかあんなふうに出来る日がくるでしょうか。

もう、腰が痛いし、

今度は足はふやけてしまいました。

座りたい。

「こっちに座って、洗濯はじめるよ。」

休憩なし？

座れるのはありがたいけど、

せめて、ふやけが直ってからがいいのだけど。

「ちょっと、休み、駄目？」

弱音。

でも、本当に手足が真っ赤になって痛い。

裸足で作業なんてしたことないし。

ルディは笑っていいよっていつてくれた。

セランがいつの間にか、私のそばに立っていた。

「最初から全部出来るなんて思ってたないさ。
少しずつ出来るようになればいいさ。

まだ、病み上がりなんだから、無理するなよ。」

セランは私の頭をぽんぽんとしてくれた。

お言葉に甘えよう。

誰かがセランを呼んでいた。

彼は、ゆっくりとした足取りで船室に戻っていった。

ルディのそばに座って、彼が洗濯していくのを見ている。
まあ、やっぱり大雑把だ。

洗濯板に2，3回こすりつけたら、絞っていく。

汚れおちてるの？それ。

洗濯機がないって不便だね。

電気製品って偉大だったんだ。

あらかた絞ったら、新しい盥に真水を入れて、
絞った服を濯いで、また絞る。

うーん。

私の握力ではあんな風に絞れまい。

全部、絞りおわったら。水を海にすてて、服の袖をロープに通していく。

洗濯ピンチなんてないので、結構間隔をあけて干していく。

全部でロープは6本。

ロープの端は船の縁に結びつけ、もう片方の端を全部もって、ルディが待っていた船員さんに渡す。

彼は、そのままマストに掛かっている網？はしご？

みたいなものをあがっていき、するする、まるでお猿さんのように。あっという間に、マストの中ほどにいました。

そこフックみたいなものが、あるみたい。

次々にロープを掛けていきます。

ルディが下で様子をみながら、船の縁にくくりつけたロープの調整をしています。

そして、ロープがピンと張られたとき、洗濯物が旗のようにはためいていました。

青い空に洗濯物。
きれいですね。

「メイ、食堂にいくよ。」

お昼ですか？

「お昼の前に厨房の手伝いがあるんだよ。」

さっき、休憩をとったから、大丈夫。

ふやけた手と足も治ったしね。

さあ。いこう。

ルディの後ろをしっかりとついていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3878ba/>

箱をあけよう

2012年1月13日01時52分発行